13　次の文章は『大鏡』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

〈九州大〉二〇二一年度出題

　このの御男君達ぞ三人おはせしが、太郎君はと申ししを、幼き人はさのみこそはと思へど、①いとあさましう、まさなう、しくぞおはせし。東三条殿の御賀に、この君、舞をせさせたてまつらむとて、習はせたまふほども、あやにくがりすまひたまへど、よろづにをこつり、祈りをさへして、②教へ聞こえさするに、その日になりて、いみじうしたてたてまつりたまへるに、舞台の上にのぼりたまひて、ものの音調子吹き出づるほどに、「わざはひかな。あれは舞はじ」とて、引き乱り、御装束はらはらと引きりたまふに、粟田殿、御色真青にならせたまひて、Ａあれかにもあらぬ御気色なり。ありとある人、「Ｂさ思ひつることよ」と見たまへど、すべきやうもなきに、御の中関白殿のおりて、舞台にのぼらせたまへば、「言ひをこつらせたまふべきか、また憎さに③え耐へず、追ひおろさせたまふべきか」と、かたがた見はべりしに、この君を御腰のほどに引きつけさせたまひて、御手づからいみじう舞はせたまひたりしこそ、楽もまさりおもしろく、かの君の御恥もかくれ、その日の興もことのほかにまさりたりけれ。もうれしと思したりけり。Ｃ父おとどはさらなり、よその人だにこそ、すずろに感じたてまつりけれ。かやうに、人のためになさけなさけしきところおはしましけるに、など御末かれさせたまひにけむ。

　この君、人しもこそあれ、れうじたまひて、そのりにより、頭にものはれて、うせたまひにき。

（注）　○粟田殿……藤原道兼。

○東三条殿……藤原兼家。

○御賀……六十歳のお祝い。

○をこつり……だましすかして。なだめて。

○あれは……我は。私は。

○鬢頰……結い上げた髪。

○中関白殿……藤原道隆。

○れうじ……いじめて。

○ものはれて……ができて。

問１　傍線部①～③について、文脈に即してそれぞれ現代語訳せよ。

問２　二重傍線部「かれさせたまひにけむ」を例にならって品詞分解せよ。

例　「定められぬ」：下二段動詞「定む」未然形＋尊敬の助動詞「らる」連用形＋完了の助動詞「ぬ」終止形

問３　傍線部Ａ「あれかにもあらぬ御気色なり」とあるが、何が原因で、どのような状態になったのか。本文に即して説明せよ。

問４　傍線部Ｂ「さ思ひつることよ」とあるが、指示語「さ」の内容を明らかにしながら現代語訳せよ。

◎問５　傍線部Ｃ「父おとどはさらなり、よその人だにこそ、すずろに感じたてまつりけれ」とあるが、

ア　傍線部について、現代語訳せよ。

イ　誰の、どのような態度に対して、このように感じたのか。本文に即して説明せよ。

問６　『栄花物語』は『大鏡』とほぼ同時期に成立した歴史物語であり、道長を中心に藤原氏の栄華を描いたものとして共通する点も多いが、相違する重要な点を簡潔に説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝まったく驚きれるほど（わがままで）

　　　②＝道兼が舞の師に福足君を教え申し上げさせるが

　　　　［別解］舞の師が福足君を教え申し上げるが

　　　③＝（道隆は）我慢することができずに

問２　下二段動詞「かる」未然形＋尊敬の助動詞「さす」連用形＋四段（補助）動詞「たまふ」連用形＋完了の助動詞「ぬ」連用形＋過去（原因）推量の助動詞「けむ」連体形

問３　Ａ兼家の祝いの席で、福足君が舞を披露する舞台に上がったが、舞うのをいやがって髪を乱し衣装も破いたことが原因で、Ｂ息子の不始末により父の祝いの興趣をそいでしまったと感じたＣ道兼が、茫然自失の状態になった。

Ｃの主語の間違いは全体０。

Ａ＝５〔具体的でないものは０。〕

Ｂ＝２〔兼家・道兼・福足君の関係が書けていればＡに含まれていてもよい。〕

Ｃ＝３〔「我を失う・正気を失う」などの類似表現でもよい。〕

問４　Ａわがままな福足君がおとなしく舞を披露するはずはないとＢ思っていた（が、そのとおりになった）よ

Ａ＝７〔「福足君は舞うまい」は必須。修飾語のないものは各減点２。「わがまま」は「自分勝手」「やんちゃ」など、「おとなしく」は「素直に」「親の指示どおりに」などでもよい。〕

Ｂ＝３〔「よ」のないものは減点１。〕

問５　ア＝Ａ父の粟田殿は言うまでもなく、Ｂ他の人でさえ、Ｃやたらに感嘆し申し上げた

Ａ＝３〔「おとど」は「粟田殿」または「道兼」と具体化していないものは減点１。〕

Ｂ＝２〔「さえ」以外の訳は０。〕

Ｃ＝５〔「感嘆」は「感心」「賞賛」なども可。訳の間違いは単語ごとに減点２。〕

イ＝Ａ舞台上で開き直った福足君を抱きかかえて一緒に舞った道隆の、　Ｂ臨機応変に対応し、Ｃ福足君にも道兼にも恥をかかさず、全ての列席者を興じさせた、思いやりにあふれた態度。

主体（道隆）の間違いは全体０。

Ａ＝３〔「動かなくなった福足君と一緒に舞う」があればよい。〕

Ｂ＝２〔「当意即妙」なども可。〕

Ｃ＝５〔「誰にも恥をかかせない」「皆を楽しませる」のないものは各減点２。「思いやり」のないものは減点３。〕

問６　Ａ『栄花物語』は編年体で、『大鏡』は紀伝体で記述され、さらに、Ｂ『栄花物語』は藤原氏賞賛一辺倒だが、『大鏡』は藤原氏批判も交えて記述しているという違い。

Ａ＝６〔編年体・紀伝体がそろっていないものは０。〕

Ｂ＝４〔藤原氏に対する記述態度の違いが明確であればよい。この部分の別解として、「『栄花物語』は通常の文体だが、『大鏡』は語りの文体で記述している」も可とする。〕

【現代語訳】

　この粟田殿（＝道兼）のご子息たちは三人いらっしゃったが、ご長男は福足君と申し上げたが、幼子というものはみなそのようなものだとは思うけれども、（この福足君は）問１①まったく驚き呆れるほど（わがままで）、予想外で、たちが悪くていらっしゃった。東三条殿（＝兼家）の六十歳のお祝いに、（道兼が）この福足君に、舞を披露させ申し上げようとして、（舞の師を招いて）習わせなさる間も、（福足君は）だだをこねて抵抗なさるけれども、さまざまになだめて、哀願までして、問１②（道兼が舞の師に福足君を）教え申し上げさせるが、当日になり、（道兼が）たいそう立派に（福足君の）舞の装いを整え申し上げなさったが、（福足君は）舞台の上に上りなさって、楽器の音調子を吹き合わせ始める時に、「いやだなあ。ぼくは舞いたくない」と言って、結い上げた髪を引き乱し、御装束をびりびりと引き破りなさるので、（父の）粟田殿は、お顔色が真っ青になりなさって、茫然自失のご様子である。居合わせた人は皆、「問４わがままな福足君がおとなしく舞を披露するはずはないと思っていた（が、そのとおりになった）よ」とご覧になるが、どうすればよいか手のほどこしようもないところへ、（福足君の）御伯父の中関白殿（＝道隆）が（御殿を）下り、舞台にお上りになるので、（人々は）「言いなだめなさるだろうか、それとも憎さに問１③我慢することができずに、（福足君を舞台から）追い下ろしなさるだろうか」と、どちらだろうかと見ていましたが、（道隆は）福足君をご自分のお腰の辺りに引き寄せなさって、ご自身で（福足君とともに）たいそう立派にお舞いになったことで、楽の音も一段と引き立っておもしろく（なり）、福足君の御恥も隠れ、その日の興趣もとりわけまさったことだ。御祖父殿（＝兼家）も嬉しいとお思いになった。問５ア父のおとど（＝道兼）は言うまでもなく、他の人でさえ、（道隆のはからいを）やたらに感嘆し申し上げた。このように、（道隆は）人に対して思いやり深い所がおありだったのに、どうしてご子孫が衰えてしまいなさったのだろうか。

　この福足君は、相手もあろうに、蛇をいじめなさって、その崇りによって、頭に腫物ができて、お亡くなりになった。